

平成 31 年 2 月 21 日

記録 教務主任

1 校長挨拶

- ・ インフルエンザは、本校ではあまり発症がなかったが、世間では猛威を奮っていた。インフルエンザ対策は学校教育ではとても気を遣っている。
- ・ 遊水地の再生が進んできて、地域ぐるみで地域の自然を守る取り組みが進んでいる。来年度は、遊水地の中に看板を作る計画を立てている。第一工区では、駐車場やトイレができて整備が進んできている。来年度は、第 3 工区にトイレが設置される予定である。
- ・ 本校の教育目標
「皆とともに」 友達同士だけではなく、障害のある人ない人を含めた共生社会という大きな中で学校教育を進めていければと考えている。
「心豊かに」 知識や技能だけでなく、人として心豊かな人に成長してほしい。
「たくましく」 これからの自分の人生設計で、自ら取り組む人になってほしい。
- ・ 「キラリホット」という言葉は、前校長が作った合言葉。子ども達の思いを発見する。次のステップは、キラリホットを育てる。見つけるだけでなく、育てることが、学校教育と思っている。
- ・ 「ダイバーシティ」ということについて話題になっている。いろいろな角度から情報を吸収してよりよいものを作っていく。多様性、いろいろな物や人を尊重する。いろいろな研修会で使われている。多様性は今まで使われてこなかったが、教育でも意識していく必要がある。
- ・ 心穏やかな人間を育てる。卒業後も自分自身で豊かな生活を築けるような学校教育の在り方が必要と考えている。

2 協議説明

学校評価をもとにした協議を主な議題として今回の学校評議員会を行っていきたい。

3 本年度の実践概要（教頭）

(1) 創立 60 周年事業の報告

- ・ 式典の 1 日で終わるのではなく、1 年を通して計画を立てて取り組んできた。
- ・ 1 学期は準備の期間として計画を行い、主に 2 学期以降に取り組んだ。
- ・ 9 月、ミュージアムキャラバンで、大会議室に昆虫の世界を展示した。中学部では、ポッチャの杉浦選手を招いて講習会を行った。
- ・ 11 月、校内作品展、60 周年の歴史の写真展、地域の野鳥や自然の展示、記念式典、60 周年記念コンサート、校内ピカピカ作戦、記念品の制作（高等部の生徒のデザインを活用）等に取り組んだ。
- ・ 2 月、モザイクアート展示を行う。

(2) 学校評価

- ・ 学校経営計画の評価をまとめた。目標から何を大事にしてきたかを確認させていただく。
- ・ 評価の欄の AB 評価は、A おおむね達成できた。B 課題が残る評価。

ア 【安全・安心な学校づくり】

- ・ 人権に関することでは、職員の意識 94.4%、いじめ体罰 0 件。
- ・ 非常時災害時対応については、火災等の避難訓練だけではなく、医療的ケア、保健等の緊急対応にも意識して訓練を取り組んでいる。やりすぎることはないので、日々継続して取り組んでいる。
- ・ 医療的ケアでは、安全な医療的ケアの実施 100% 達成。今後も引き続き安全に行っていく。
- ・ 摂食指導では、給食課で摂食講習会を行っている。85% の評価には、もっと研修をしたいという意見が含まれている。
- ・ 清潔で子どもが生活しやすい環境づくりでは、環境美化に高い評価が得られた。

イ 【生きる力を育む授業実践】

- ・ 職員の授業実践、新学習指導要領に伴う研修に取り組んできた。
- ・ 情報機器の活用は、まだまだ努力が必要である。
- ・ 図書活動では、お話の会、PTA の方に来ていただき、児童生徒が楽しみにしている活動となっている。引き続き協力しながら取り組んでいきたい。
- ・ 進路については、保護者の意識を上げていくことが課題となっている。
- ・ 自立活動に関しては、外部の先生を招いて学習会を行っている。また、専任の教員を配置し、校内の巡回指導を行った。

ウ 【保護者・地域との連携】

- ・ 社会に向けた情報発信では、ホームページを今後改善していく予定である。
- ・ 地域とのつながりについては、この後意見をいただきたい。学校経営として力を入れていきたい項目ではあるが、なかなか難しい内容である。
- ・ 学校間交流、居住地校交流（小学部 29 名）は、成果が出ている。しかし、学年や学部が上がっていくと、交流の方法が難しくなっている。
- ・ 地域の人材活用は、授業の中で活用は増えてきている。今後も活用していきたい。

エ 【学校運営の基盤となる取組】

- ・ 頼もしい教員を目指して、研修の充実、コンプライアンスの徹底を行っている。
- ・ 業務改善では、業務の精選、子ども達に接する時間を大切にしている。

4 本年度の保護者学校評価

- ・ 各項目の評価をグラフに表した。
- ・ 地域の行事への参加や進路に関することについて、課題と感じている保護者が多いことがグラフから読み取れる。

5 学校運営に関する意見交換

(1) 安全・安心な学校づくり～学校に求められる災害対策

PTA

- ・ PTA の地区会について、課題が残る。活発な取り組みをしている地区と、そうではない地区とで地区によって差がある。
- ・ PTA の連絡先を知らない地区もあったりした。縦のつながりだけでなく、横のつながりが薄くなってきている地区があった。現在は、すべての地区で、お互いが連絡を取れるようになってきている。防災訓練については、12月の寒い時期のこともあり、参加ができない家庭もあった。

学校

- ・ 高等部では、自分の身は自分で守る教育をしている。
- ・ 地域の防災訓練に行きたいのに行けない理由があれば、教えていただければ嬉しい。安心して参加できる仕組みを作っていけるようにしたい。

評議員

- ・ 息子が在籍していた10年ほど前、地区ごとの担当の教員が決まっていた、教員と一緒に地区の防災訓練に参加していた。ただ、教員が休日の勤務になるので勤務時間の問題があった。教員と一緒に参加できる環境があれば、地域の防災訓練に参加しやすい。教員と一緒に参加することで、地域に障害者がいることを周りの人たちに伝えやすかった。
- ・ 地域によっては、高齢者の対応に追われているので、障害者まで助けるのは難しいと言われたことがある。防災名簿も地域によっては、数年前から更新されていない。
- ・ ある地区は、卒業生も地区会に数年前まで参加できていた。最近では声がかからないが、住んでいるので、ぜひ声を掛けていただけるとありがたい。

学校

- ・ 学校では、保護者の方に、要支援者登録をしてくださいと呼びかけている。また、民生委員にまず声をかけてくださいと呼びかけている。
- ・ 実際は要支援者に対する支援はどうなっているのでしょうか。

評議員

- ・ 要支援に対する声はあまり上がってきていない。自分の家で何とかするという家庭もある。あえて、民生委員から働きかけることはしていない。個人情報保護についての制限があるので、民生委員から働きかけることはしにくい。家庭から申請があれば喜んで対応していきたい。

学校

- ・ 昔は自分で何とかできると考えていたとしても、時間が経つと人の気持ちは変わってくるので、何かきっかけを作ってもらえると嬉しい。
- ・ 学校の教員と一緒に防災訓練に参加しやすいのであれば、なにか教員も手助けをしたほうが良い。

学校

- ・ 高齢者は、地域の防災名簿を作成する義務があるが、障害者には名簿作成義務がない。そのため、存在を知られていないことがある。自己申告をして、自分があるこ

とをアピールしていく必要がある。

- ・ 地域の中で、家に居る時に災害にあってしまったら、相談できる機関はあるのか。

評議員

- ・ ご家庭の考え方はそれぞれなので、積極的に周辺住民と関わりたい家庭や、関わりたくない家庭がある。

学校

- ・ 周辺住民と関わりたくないと考える家庭を変えていくには、どういったアイデアがあるか教えていただきたい。

評議員

- ・ 数年前よりも、地域の状況は変わっている。特別支援学校を卒業している子がいる家庭は、周りとの関わりを持つことが上手である。
- ・ 昔から障害者が住んでいるお宅は、近所と交流ができるが、引っ越してきて、アパートマンションに住まわれている家庭・家族問題は見えていない。それが一番のネックである。

PTA

- ・ 要支援登録をしている家庭は、地域と繋がりたい家庭なので、民生委員に連絡をして、登録をしている。登録してさえあれば何か助けてもらえると考えている。
- ・ 一方で家庭によっては、他の人に頼らないで自分たちでなんとかしようと考えている家庭もある。
- ・ 教員と一緒に防災訓練に参加した時代のことを知っている保護者は、教員の力を借りられると地域の防災訓練に行きやすくて良かったという意見が出ている。

評議員

- ・ 学校としてできることは、地域の学校との交流（学校交流、居住地校交流）を積極的に行うことで、地域の子ども達に、障害のある子どもがいるということを知ってもらう機会になる。

評議員

- ・ 地域交流先の生徒さんから誘ってくれると参加しやすいと思う。

評議員

- ・ 保護者の人たちには、「あなたの担当の民生委員はこの人ですよ」という名簿は伝わっているか。

PTA

- ・ 以前は、自治会長さんや民生委員さんの名簿一覧をもらうことができた時があったが、今は自分で自治会長さんを訪ねる行動をしている。

学校

- ・ 静岡県の居住地校交流のきっかけは、同じ地域に住んでいても、災害があった時に障害のある自分のことを知られていないのでは困るというニーズから発生してきている。
- ・ 麻機地区は、毎年10月に地区会、11月に支援者登録をしている。定期的にチェックしてもらえると、新しい方や、いなくなった方が分かるので大切。
- ・ 来年からの居住地校交流は交流籍を使用することで、地元との関わりやつながりが強く持てるようになるのではないかと考えている。

- ・ 3月9日（土）静岡第一テレビで静岡県の災害対策の状況についての特集を行う。本校でも取材を受けた。学校と保護者だけでなんとかすることは限界がある。自分たちで守ることは大事だが、学校や地域と繋がるのが大切である。何かのときには連携を取れるようにすることが必要である。
- ・ 防災のマニュアルの使い方の工夫。実際に災害が起こった時にどう動くかを常に意見交換させていただけるとありがたい。

評議員

- ・ 病気や障害に対する理解が地域にあまりないかもしれない。地域の方に分かってもらうためにも、教員が橋渡しをしてもらえると地域の理解が進みやすい。障害の理解に対するメッセージを送る必要がある。
- ・ 民生委員さんにも障害の情報を知ってもらう必要がある。民生委員だけでなく、地域の人たちにもメッセージを送っていく必要がある。

評議員

- ・ 県の心理士会で発災後の心のケアの担当をしている。
- ・ 昨年、県の担当の方と情報交換をしたが、準備が整っていない状況であった。心のケアは、長期に取り組むということを知っておいていただけるとありがたい。

学校

- ・ 自治会から、「何をしてあげたらよいかかわからない。」と言われている。学校や障害のある方は、何を求めているのかを具体的に伝えられるようになるとよい。

(2) 保護者・地域との連携～共生教育の実現

ア 各学部での取り組み報告

小学部

- ・ 学校間交流で城北小学校と交流している。また、小学部の半数の児童が希望して、地域交流で居住地の学校と交流をしている。学級活動や音楽、国語、算数の授業に参加している。
- ・ 交流は、きっかけとして取り組んでいて、交流後に地域で声をかけてもらったり、関わったりすることができるようになると良いと考えている。

中学部

- ・ 昨年度までは、居住地校交流があったが、今年度は行っていない。
- ・ 部活でポッチャやフライングディスク等のスポーツを行っていて、保護者の協力が不可欠だが、積極的に地域の大会に参加している。

高等部

- ・ 学年が上がるほどに、交流が難しくなる。理由は、授業の進み具合に影響があるため。交流も大切だが、現場実習等のもっと大切なことを授業の中で充実させている。
- ・ 大学生と関わることは生徒にとって良い機会となる。もしよければ、大学生がボランティアで生徒と交流できればと思っている。

病弱学級・訪問教育

- ・ 交流籍が充実してくると、地元の学校に帰る時にスムーズな支援や引き継ぎができるようになると考えている。
- ・ 病弱学級・訪問教育では、大学生ボランティアを活用している。若い学生さんがい

ることで、子どもたちにとってよい交流となっている。

寄宿舎

- ・ 放課後に寄宿舎に来ていただいて交流を行っている。ベーター麻機の方と食事会、麻機地区の自然の説明、太鼓、津軽三味線の体験、バンド、新年会で踊り等の交流を行っている。学習会で、作業療法士の方に来ていただいて、生活動作（身体）の勉強を行った。また、消防署、警察署と連携し、防災、防犯の勉強もしている。

イ 保護者が期待する、地域との関わりとは何か。

PTA

- ・ 小学部4年生まで、居住地校交流を行っていたが、交流先の教員が、障害のことを知らないが多かった。また、交流へ行っても、交流になっていないが多かった。
- ・ 交流先の教員へ障害に対する理解を広めてほしい。4年生だと、休み時間の15分のみでの交流であったため、子どもにとって交流の意味が無いと感じたため、4年生でやめてしまった。

評議員

- ・ 障害に対する肯定的理解がないと実施困難である。肯定的理解してもらえるには、障害に対する理解と、障害を持っていることへの心の理解をする必要がある。理解してもらうには、教員が理解してもらうための資料を作る必要がある。そして、特別支援学校側が説明をきちんとする必要がある。
- ・ 学ぶ喜び、体験する喜びを味わえるようにすることが大切である。喜びを味わえるように支援の構造化が必要である。送り出す方が、準備をしっかりする必要がある。

学校

- ・ 居住地校交流の交流籍がある地域の学校の教員が、障害について学んでいく必要があると考える。

評議員

- ・ その必要もあるが、まずは障害について分かっている人からメッセージを発信していく必要があると考えている。

学校

- ・ 居住地校交流の取り組みについて。保護者から要望があった場合、教員が相手校と打ち合わせをして、必要な情報を提供している。
- ・ 必要な情報は何かについて、もう一度しっかりと考えていく必要がある。

学校

- ・ 交流籍は、法的な根拠はない。交流籍が出てきたのは、学校現場からである。
- ・ 交流籍を行うためには、それなりの手続きと準備が必要である。
- ・ 浜松市は交流の要項を作っており、それに特別支援学校が参加させてもらっている状況である。静岡市は、今後その体制をつくっていくと聞いている。

学校

- ・ 共生共育は、卒業後もずっと続く。学校に期待することは何か。

評議員

- ・ 訪問カレッジという取り組みを行っている。つばさ静岡の施設を使って、高校卒業後の子どもを対象に学びの活動に取り組んでいる。ボランティア的に行っている活動なので、中央特別支援学校の教員も参加していただけると嬉しい。高等部卒業後の子どもたちは、教育の場が無くなってしまう。毎日暇になってしまう子ども達が多い。なので、訪問カレッジはとても大切な活動と感じている。

評議員

- ・ 静岡大学の学生の7割程は、外の学校に学びに行かせている。隣の静岡北特別支援学校にも実習に行かせている。
- ・ 静岡大学の入学生は、ボランティア体験を欲している。高校生年代の子ども達も機会を与えれば、ボランティアとして活躍することができる。高校生が特別支援学校に来訪して勉強できると良いと考えている。

評議員

- ・ 保護者と学校の連携は大切。個別の指導計画は、きっちりと話し合う必要がある。ともに学びあい、同じ方向を向いて取り組める。個別の指導計画を大切にしてほしい。
- ・ 保護者の方には、学校の教員と話をすることで、卒業後に活躍できる場づくりや卒業後の連続性についてのアイデアを期待したい。

評議員

- ・ 息子は、2組に在籍していた。当時、3組しか交流していなかったが、お願いをして観山中と交流をやらせてもらった。体育祭や学校コンクールの交流ができて、良い体験であったので、ぜひ交流に取り組んでいただきたい。

評議員

- ・ 麻機地区への木工製品の交流の取り組みは、大変に良いものである。これからも続けていただきたい。

6 御礼の言葉、終了

校長

- ・ 今後も学校側と地域との連携を図りながら、より良く教育活動ができるように取り組んでいきたい。ありがとうございました。